

## 東アフリカ牧畜民トゥルカナにおけるコミュニケーションの作法

長い間抱え込んできた宿題に答えを出す

北村光二

### 今日の話の課題

- ・私たちの困惑と違和感を解消しつつ、彼らの生き方にある「揺るぎなさ」の秘密を解き明かす
  - －人類学者としての避けて通れない課題
- ・今日の話のタイトルにある「宿題」に答えを出したいという思い
  - －先生に与えられた宿題に生徒として答えを出す
- ・人類史というスケールを念頭に置いて、私たちがいるところを「近代社会」、トゥルカナがいるところを「牧畜社会」として、その両者の対比としての理解を考える

### 「物を乞われる側」は何をしているのか？

- ・要求と拒否というやり取りが終わりのないものように続くのは要求される側があくまでも自らの利益を確保しようとして拒否し続けているからでもある？
- ・双方がこのやりとりを放棄しないのは、いつかの時点でいずれかの側の選択の修正によって決着が図られると想定しているからでもある
- ・乞われる側が、相手との交渉が継続しても、それを打ち切っただけで利益を確保する場合以上のことを実現できないにもかかわらず、そのコミュニケーションを放棄しないのは、その交渉が何らかの決着を導き出したときに、それを相互に承認できるものにするためである

### 私にとってのトゥルカナ体験

- ・1986年に、人類学的調査のためにトゥルカナと暮らし始めた最初の数か月の間、私はそこでどのように振舞ったらよいのかについてまったく自信を失っていた
- ・その中のもっとも典型的な場面は、彼らがさまざまな機会をとらえてする「執拗な物乞い」に巻き込まれたときであり、相手に強く自己主張する彼らの振舞いに強烈な違和感と戸惑いを感じるようになる
- ・その一方で、彼らとの付き合いにも慣れ、彼らと一緒に暮らすことが当然のことになるにつれて、自己肯定的で揺るぎない彼らの生き方に心からの羨望の念を抱くようにもなった

### トゥルカナの「物乞い」のコミュニケーションに対する私たちの違和感と困惑

- ①物を乞う側が、とりあえずは拒否しようとしていることが明らかな相手にやみくもに同意を迫ることで相手との間にどのような関係を作り出そうとしているのかということ
- ②物を乞うて相手が拒否したとしても乞う側がその獲得をあきらめないためにその要求と拒否というやり取りが終わりのないものようにいつまでも続くということ
  - ・「物を乞う側」は相手の事情を全く顧慮せずに自らの利益を確保することに邁進するかのように振舞っていると感じられる

### 「物乞い」のコミュニケーションについての理解の見直し

- ①物を乞われる側は、交渉の決着がどのようなものになるにしても、それを当事者たちが相互に承認できるものにして、少なくとも相手の働きかけがある限りはその依頼に誠実に応答しようとする
- ②物を乞う側は、相手が拒否しても、コミュニケーションの接続を継続して共通理解を積み重ねることによって、自らに有利なゴールを実現しようとする
  - ・それぞれの当事者はどちらも、相手の自発的な選択を尊重して、たとえそれが自らの期待に反するものであってもそのときの交渉を放棄せず、あくまでもコミュニケーションの接続によって共通理解を目指そうとする

## 利害が対立する問題への対処(私たちの場合との比較)(1)

### 1) 私たちのやり方

・当事者のいずれからも切り離された第三者に帰属する基準(例えば、規則や制度)を参照し、それを共有することによって、そのときの利害の対立を調停するような「適切なプラン」について合意を形成する

—「お返しの義務を負うことを前提に一方から他方へ援助を行う」というプランについて合意する

・問題対処のための適切なプランの選択という作業と、それにもとづく具体的な対処の実行の過程とが明確に分離されている

—そのプランの監視のもとで個々の行為の接続が調整される

## 利害が対立する問題への対処(私たちのやり方との比較)(2)

### 2) ツウルカナのやり方

・両者の利害の対立を調停するうえでの適切なプランが前もって想定できるとは考えていない

・コミュニケーションの接続を継続して双方にとっての共通理解を生み出しながらそれを先へ先へと進めることによって、双方が納得する決着を実現しようとする

・交渉の決着がどうなるかはそのときの行きがかりに委ねながら、コミュニケーションの接続を可能にする相互行為の場を繰り返し再生産可能なものとして確保する「社会の秩序」を生成・確認しようとする

## 利害が対立する問題への対処(私たちのやり方との比較)(3)

### 1) 私たちのやり方

利害の対立を調停するプラン設定のためのコミュニケーション  
→ 「適切なプラン」についての合意形成

+  
合意したプランに従った行為選択とその接続 → 集団的問題対処

### 2) ツウルカナのやり方

コミュニケーションの接続による共通理解の積み重ねを先へ先へと進める

+  
相互行為の場を繰り返し再生産可能なものにして秩序を「社会の選択」として実現する

交渉の決着  
+  
社会の秩序の生成・確認

## 仲間との協力による問題対処のやり方(1)

①この種の利害が対立する問題への対処において、近代に生きる私たちは、第三者的な「適切さ」を手がかりにして相手との合意を実現するというやり方だけではなく、仲間と協力し合うことによって対処法を見出すというやり方も知っている

→「成員資格」を構造原理とする組織のコミュニケーション

②それとの違いに着目すれば、ツウルカナがしているやり方は、同じ場所に居合わせていることを構造原理とする「対面コミュニケーション」による問題対処だということになる

## 仲間との協力による問題対処のやり方(2)

### 1) 組織のコミュニケーション

①地位の差や役割の分化にもとづく非対称な関係を前提にしたコミュニケーションの比重が高い

②成員資格に規定された固定的な相互依存関係にもとづいて問題対処における協力し合う関係が容易に作り出される

③地位の差や役割の分化にともなって、権限にもとづく命令や指示のコミュニケーションが活用され、より効率的に集団的意思決定や集団的対処が実行できる

④組織の意思としての選択に対しては、成員は個人としてそれを拒否できない

## 仲間との協力による問題対処のやり方(3)

### 2) 対面コミュニケーション(=ツウルカナのやり方)

①地位の差や役割の分化がない対等で対称的な関係を前提としたコミュニケーションの比重が高い

②既定の関係に依存することなく、そのときその場で協力し合う関係を一から生み出せるというのでなければならない

③対処のプランについて合意を形成するのは困難であっても、顕在化してしまった相互の対立の解消と共存の秩序の再建のために協力し合う関係に入るというやり方が利用可能になる

④対立を解消し共存の秩序を再建するというより大きな課題に対しては、それぞれの個人の自発的な選択の重ね合わせとしての「われわれの選択」による対処が可能になる

## 対面コミュニケーションによる問題対処

・組織のコミュニケーションにある「成員資格」による規制という手がかりがないままに、対面コミュニケーションによって対面する相手との間に協力し合う関係を直接作り出さなければならない

・それが可能になるのは、当事者たちが、同じ問題に同じ気持ちで取り組み、結果として喜びを共有できるような「われわれの選択」をその場に生み出すことができる

→そのときの相互行為の決着が、相互の利害の対立を解消して共存の秩序を再建するというより大きな社会のあり方についての選択になっているとき、それがより容易になる

## トゥルカナ的な振舞い方

### (1) 相互行為の場の確保

①「いつでも、とりあえず相互行為の場を確保しようとする」というやり方は、トゥルカナどうしが行うコミュニケーション一般に適用可能な特徴である

・トゥルカナでは人に話しかけられたときにそれを無視することはまったく不可能であるかのように事態は進行する

・人びとはとりあえず仲間との相互行為の場を確保して、直面するさまざまな問題に対処しようとしているかのようである

②さらに、そのような振舞い方は病気になることへの対処のあり方にも反映している

・とにかく自分たちが知っている病気への対処法をできるだけ試さずにはいられないという感じになる

・病気に責任がある「もの」との間に相互行為の場を確保しようとしているかのようになる

## トゥルカナ的な振舞い方

### (2) 「われわれの選択」による問題対処

③より本格的な病気への対処法という位置づけになる家畜を犠牲に捧げる治療儀礼の執行においても、「われわれの選択」による問題対処という特徴が見出せる

・日々の暮らしを共に担っている人びとが集団として「超自然的存在」と向き合い、それに対する帰依を表明してその恩寵に浴そうとする一方で、それぞれの個人は、その存在への帰依を含めてその儀礼で実際に行われることを、当事者として自ら進んで選び取っている

・彼らは、集団として「超自然的存在」と向き合って治療儀礼を行うことで、日々の生活を背後から支える世界の秩序を再建しようとしているが、それを個人個人の自発的選択の重ね合わせが生み出すはずの「われわれの選択」として実行している

## 結論：トゥルカナの振舞い方

①トゥルカナは、環境にある「もの」や周囲の仲間と直接向き合って身体を使った相互行為を生成しながら、自らにとって望ましい結果を実現しようとするだけではなく、個々の相互行為を超え出るより大きな世界を支える基盤を自ら作り出そうとしている

②トゥルカナは、問題への集団的な対処の試みに、対等な関係にある者どうしとして参与してその結果に喜びを共有できるようになることで、その活動を自らの動機づけにもとづく「私の選択」として経験しつつ、同時に、仲間と共有される「われわれの選択」としても経験している

## 結論：トゥルカナのコミュニケーションの作法(1)

・これらのトゥルカナ的な振舞い方を指摘することで、彼らが何か特別な道徳意識や価値観を持っているとか、ましてや、私たちが失ってしまった汚れない人間らしさを保持しているのだと言いたいのではない

・しかも、彼らの振舞い方は私たちにも十分理解可能なものであり、実際に実行してもいるものである

・ただし、1人の個人が社会的関係世界に参加して、そこに自分の居場所を見出そうとして、集団的な意思決定や集団的な問題対処を行おうとするときに、何が手がかかりにするのかという点に関して、私たちと彼らとの間には決定的な違いが存在する

## 結論：トゥルカナのコミュニケーションの作法(2)

・私たちは、規則や制度のような、対面コミュニケーションが行われるその場所の外部からもたらされるもので、時間的に先立って用意されているものに依存したり、そのコミュニケーションとは独立に成立している「組織」における地位・役割関係に依存したりする

・トゥルカナは、その手がかりを、対面コミュニケーションそのものと、その接続によってもたらされる相互行為の経緯そのものから調達しようとする

→対等な相手に提示されるそれぞれの都合を優先させた選択によって不安定な緊張状態がもたらされるが、それに対応するために、これまでに述べたようなやり方が、最低限の「作法」としてどうしても必要になる

### 結論:トウルカナのコミュニケーションの作法(3)

・私たちの社会にある「自由には責任が伴う」という言い方は、「個人の自由」は「社会的な責任」の範囲内でしか認められないという考え方を示している

・それは結局のところ、私たちは、社会的関係世界で生きて行くうえでの根拠を私たち自身の内に見出すことはできない、ということを意味している

・トウルカナは、「結末は行きがかりに委ねる」という「非決定の態度」を持ち込むことで、個人の自由を犠牲にすることなく、むしろ個人の自由な選択が社会の秩序を作り出すという可能性をその場で確認しようとしているのだ